福岡市埋蔵文化財調査報告書第1520 集

南八幡遺跡 12

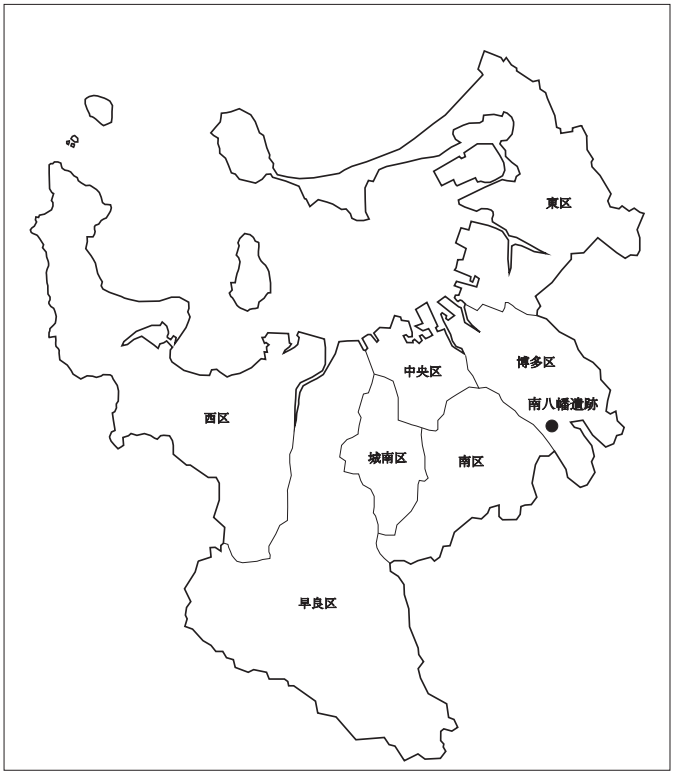
—第22 次調査報告—

２０２４
福岡市教育委員会

南八幡遺跡 12

―第 22 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1520 集



調査番号　2134
調査略号　MHM-22

２０２４
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は集合住宅建設工事に伴う南八幡遺跡第 22 次調査について報告するものです。調査では弥生時代の住居跡などが確認され、集落の一端を明らかにすることができました。

本書が文化財保護へのご理解とご協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、株式会社グッドライフカンパニー様をはじめとする関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和６年３月 22 日

福岡市教育委員会

教育長　石橋　正信

例言

1．本書は博多区寿町２丁目地内の集合住宅建設に伴い実施した南八幡遺跡第 22 次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3．本書に使用した国土座標値は、すべて世界測地系（第Ⅱ座標系）による。
4．本書に使用した方位は、すべて座標北である。
5．本書に掲載した遺物の番号は通し番号とした。
6．本書に使用した遺構実測は中園将祥、鶴来航介が作成した。
7．本書に掲載した挿図の作成、製図、写真撮影、執筆は中園、鶴来が行った。
8．本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。
9．本書の編集は、鶴来がおこなった。

遺跡名	南八幡遺跡	調査次数	22 次	調査略号	MHM-22
調査番号	2134	分布地図図幅	井尻	遺跡登録番号	0051
申請地面積	297.52 ㎡	調査対象面積	159.85 ㎡	調査面積	128.40 ㎡
調査期間	令和３(2021)年 11 月 15 日～12 月 23 日			事前番号	2021-2-259
調査地	福岡市博多区寿町２丁目３番，４番				

本文目次

序
Ⅰ．はじめに…… 1
　１．調査に至る経緯…… 1
　２．発掘調査の組織…… 1
　３．立地と歴史的環境…… 1
Ⅱ．調査の記録…… 5
　１．調査の概要…… 5
　２．竪穴建物（SC）…… 5
　３．溝（SD）……20
　４．井戸（SE）……20
　５．その他の出土遺物……21
Ⅲ．まとめ……21

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、福岡市博多区寿町二丁目３番、４番における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会届出を令和３年６月８日付で受理した（事前審査番号 2021-2-259）。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である南八幡遺跡に含まれていることから、令和３年９月 14 日に確認調査を実施した。その結果、現地表下 95 ～ 120cm で赤褐色の鳥栖ローム層を検出し、その上面で竪穴建物を確認した。この調査成果をもとに遺構の保全等に関して申請者と協議をおこなった結果、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。申請地 297.52㎡のうち、調査対象としたのは工事で埋蔵文化財に影響が及ぶ 128.40㎡である。

その後、令和３年 10 月 27 日付で株式会社グッドライフカンパニーを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、同年 11 月 15 日から発掘調査を、令和４・５年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

２．発掘調査の組織

調査委託：株式会社　グッドライフカンパニー
調査主体：福岡市教育委員会　（発掘調査：令和３年度　資料整理：令和４・５年度）

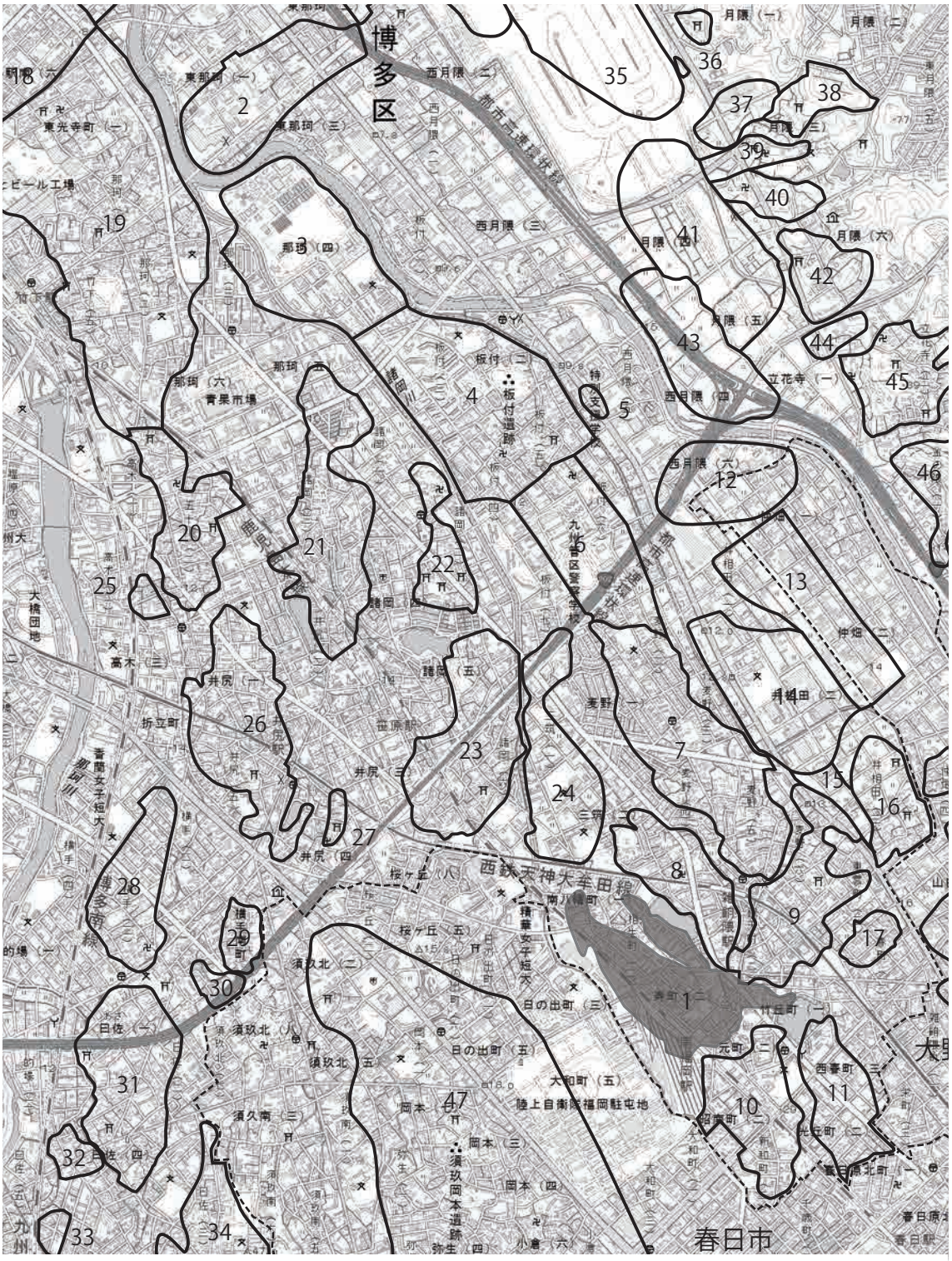
調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波正人
	調査第１係長	本田浩二郎
庶務担当：文化財活用部文化財活用課	管理係	井手瑞江（令和３年度）
		内藤愛（令和３～５年度）
事前審査：文化財活用部埋蔵文化財課	事前審査係長	田上勇一郎
		三浦悠葵
調査担当：文化財活用部埋蔵文化財課		鶴来航介　中園将祥

３．立地と歴史的環境

南八幡遺跡は、古くから雑餉と総称される雑餉隈にあり、位置的には大野城市と春日市に挟まれた福岡市の南端部にある。福岡平野を貫流する御笠川と那珂川との間にある春日原丘陵の東辺に並行してのびる丘陵上に立地する。春日原丘陵には、奴国王墓とされる須玖岡本遺跡があり、その周縁には青銅器工房跡の須玖永田遺跡や須玖五反田遺跡が展開している。遺跡の所在する低丘陵は、春日原丘陵から北東へ１km の距離にある。この丘陵は鳥栖ローム層を基盤とし、諸岡川などの開析による谷が幾筋も彎入して複数の低丘陵を形成している。この雑餉隈の低丘陵上に点在する遺跡を地形的に区分して麦野Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡と呼んでいる。

この丘陵の西北縁に北西から南東に長く延びる南八幡遺跡は、東を麦野Ｂ・Ｃ遺跡と南は雑餉隈遺跡との間に開析谷が細長く彎入して丘陵を画している。この丘陵でもっとも古い遺物は、旧石器時代の石刃やナイフ形石器が麦野Ａ１次調査や雑餉隈５・10 次調査区、南八幡 12 次調査区で出土しており、散漫ながら台地の広範囲に及んでいる。

縄文時代の遺構は希薄である。麦野Ｂ３次調査区や南八幡６次調査区、中ノ原５次調査区などで「落



1. 南八幡遺跡　2. 東那珂遺跡　3. 那珂君休遺跡　4. 板付遺跡　5. 板付東遺跡　6. 高畑遺跡　7. 麦野 A 遺跡　8. 麦野 B 遺跡
9. 麦野 C 遺跡　10. 雑餉隈遺跡　11. 中ノ原遺跡　12. 井相田 D 遺跡　13. 仲島遺跡　14. 井相田 C 遺跡　15. 井相田 E 遺跡
16. 井相田 A 遺跡　17. 井相田 B 遺跡　18. 比恵遺跡群　19. 那珂遺跡群　20. 五十川遺跡　21. 諸岡 A 遺跡　22. 諸岡 B 遺跡
23. 笹原遺跡　24. 三筑遺跡　25. 井尻 A 遺跡　26. 井尻 B 遺跡　27. 井尻 C 遺跡　28. 横手遺跡
29. 寺島遺跡　30. 笠抜遺跡　31. 曰佐遺跡　32. 上曰佐遺跡　33. 高椋遺跡　34. 弥永原遺跡　35. 下月隈 D 遺跡
36. 下月隈鳥越遺跡　37. 天神森遺跡　38. 下月隈 A 遺跡　39. 下月隈 B 遺跡　40. 上月隈遺跡　41. 下月隈 C 遺跡
42. 上月隈 B 遺跡　43. 立花寺 B 遺跡　44. 文殊谷遺跡　45. 立花寺遺跡　46. 金隈遺跡　47. 須玖・岡本遺跡（春日市）

図 1　遺跡分布図（S= 1 ／ 25,000）

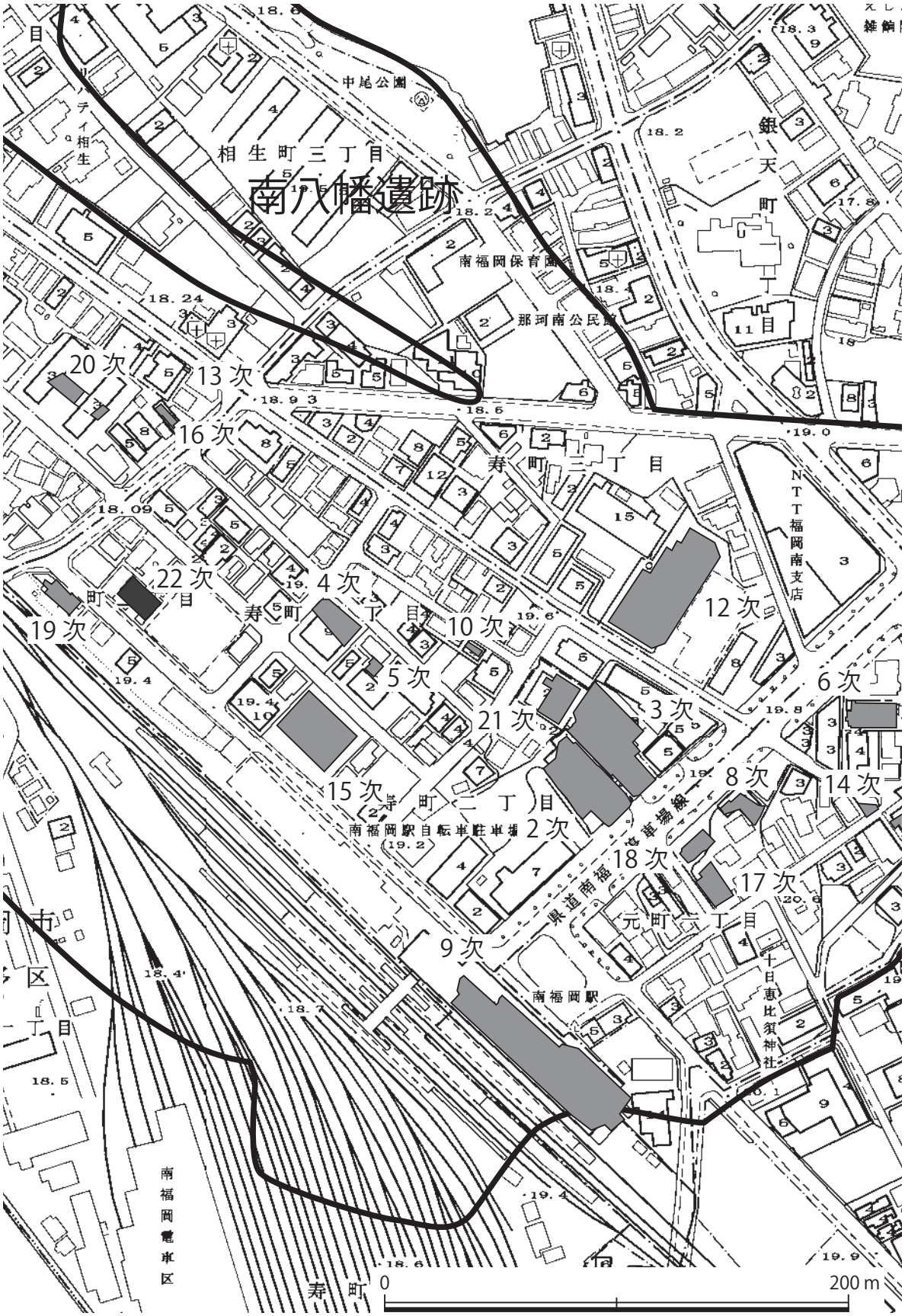


図２　22 次調査地点周辺の調査地点（S= 1 ／ 2,500）

とし穴」と推測される土坑が検出されているが、時期は明確でない。

弥生時代になると、一転して遺構は広範囲に広がりをみせる。前期は丘陵南端の雑餉隈５次調査区で円形住居と貯蔵穴からなる集落跡が検出され、大規模な中心的集落であった可能性が考えられる。中期には麦野Ｃ遺跡で方形住居が検出されている。後期には、雑餉隈５次調査区や南八幡５・９次調査区で住居や掘立柱建物群が検出されている。南八幡遺跡 19 次調査区では銅鏃鋳型が出土し、青銅器生産の可能性を示唆する。この丘陵では、南縁の三つの丘陵上で比較的小規模な集落が点的に営まれたとみられる。一方で、墳墓域は麦野Ｃ５次調査区や南八幡 17 次調査区で甕棺墓が単体で見つかったのみで、集落域にともなう墓域は明確でない。

古墳時代になると遺構はまた希薄になる。とくに前期から中期の遺構や遺物はほとんどみられない。後期には南八幡２・３次調査区で竪穴建物が検出されており、一定の集落域を構成したものと推測される。

奈良時代には掘立柱建物群をともなう大規模な集落域が出現し、その規模と配置は官衙的性格を想起させる。さらに８世紀前半から後半になると丘陵の全域にわたり集落域が展開する。雑餉隈５次調査区で 50 棟を超える住居が、また近接する麦野Ｃ１・５・13 次調査区では 100 棟におよぶ住居群が検出されている。住居は数回にわたり建て替えられており、長期的に集落が展開していたと推測される。とくに、雑餉隈遺跡や麦野Ｃ遺跡はその傾向が顕著で、この丘陵における拠点集落のような様相をみせる。あたかも「雑餉隈」の名が、大宰府官人の雑餉の居住地や食糧倉庫が建ち並ぶ場所とする古説に符合するようである。

なお平安時代の初めには集落域は急速に縮小する。麦野Ａ３次調査区で井戸跡が検出され、中世になると集落の中心域が雑餉隈周辺から麦野周辺へと移行することがうかがえる。

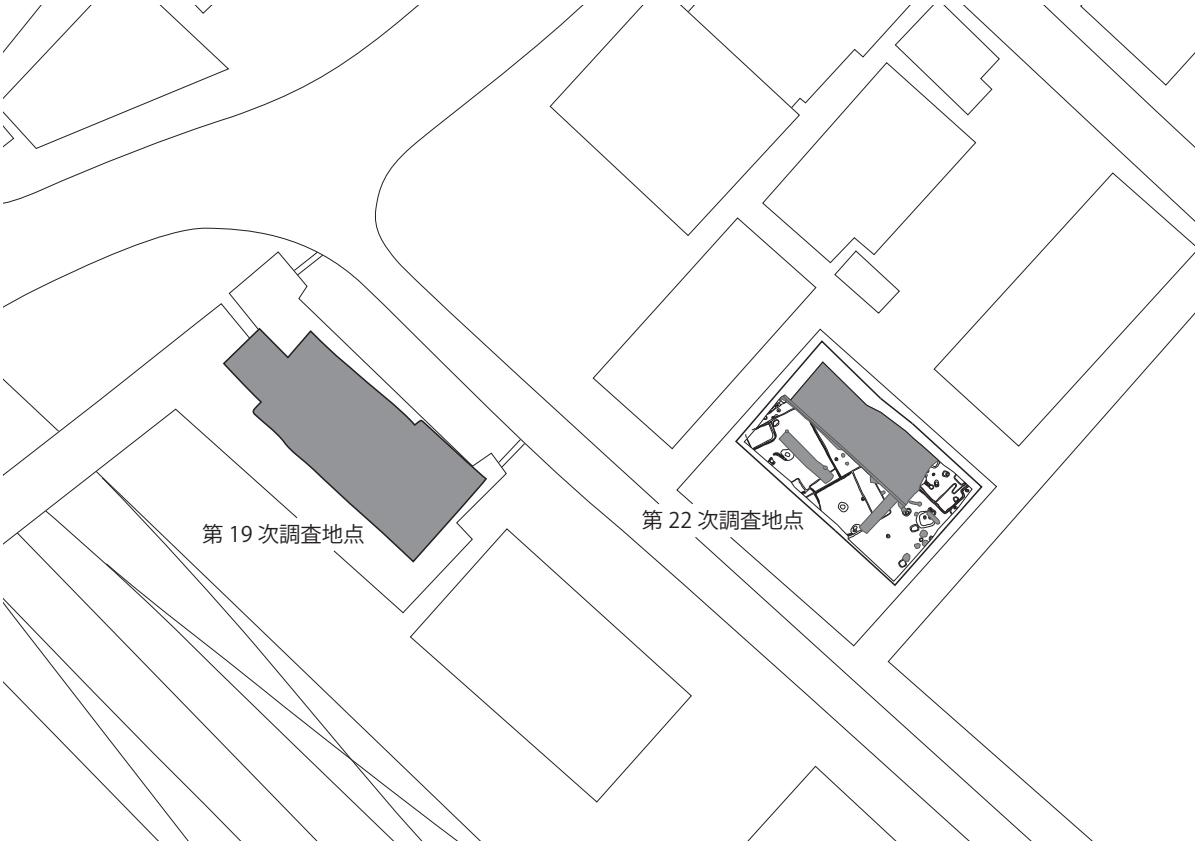


図３　22 次調査地点の位置（S= 1 ／ 500）

Ⅱ．調査の記録

１．調査の概要

本調査区は南八幡遺跡の中央部西側に位置する。南八幡遺跡じたいが丘陵の西側縁辺に立地しており、調査地点は西側の低地に向かって落ち込む台地の縁辺にあたる。現在の地表面は、調査区の面する道路部分で標高 19.1 mであり、ＪＲ鹿児島本線の線路を挟んだ西側の低地部と比して最大で３m ほど高い。遺跡全体でみても東から西に向かって傾斜することから、緩傾斜地の縁辺部に相当すると捉えられよう。

南八幡遺跡は弥生時代から古代を主体とする複合遺跡だが、遺跡西側ではとくに弥生時代後期から終末期にかけて活発な居住活動が展開する。道路を挟んで向かい合う 19 次調査では、銅鏃鋳型をともなう弥生時代終末期の竪穴住居のほか、同後期の竪穴住居が見つかっている。また 230 mほど南の９次調査では、同じく後期に多量のガラス玉を包蔵する竪穴住居が複数みとめられ、遺跡の性格を考えるうえで興味深い。

11 月 15 日に機材を搬入し、調査対象範囲の南東側から重機による表土掘削をはじめた（Ⅰ区）。現地表面より 0.9 mほど掘り下げたところで地山となる鳥栖ローム層を検出したことから重機掘削を止めたが、東側ではコンクリート基礎の埋設にともなう深い攪乱をみとめたため、一部をローム層に達するまで重機で掘り下げ、残りを人力で掘削した。この攪乱部は現地表面より３mほど深く、想定をこえる排土が生じたため、当初は二転による排土処理を予定していたが、やむを得ず三転での調査となった。コンクリート基礎はⅠ区中央から道路と平行に北へ伸びており、基礎より東側では井戸１基をのぞいて遺構は一切確認できなかった。Ⅰ区の北側へ順次展開したⅡ区、Ⅲ区においても西側では竪穴住居が検出されたことから、本来は東側にも広がっていた可能性が高い。なお調査対象範囲の東側および北側は、住宅が近接することから安全のため予定より１mほど引きを取っており、その分調査区も狭まっている。12 月 21 日に埋戻しを完了し、同 23 日に機材および遺物を搬出して撤収し、委託者に調査地を引き渡して調査を終了した。

試掘調査の結果にもとづいて、今回は１面のみの調査とした。弥生時代の竪穴住居３棟と井戸１基、土坑１基、溝１条のほか、複数のピットなどを検出した。遺物はコンテナ７箱分を数える。

２．竪穴建物（SC）

（1）１号住居

１号住居は１区東隅で検出した。北側は攪乱の影響を受けており、東側は調査区外へ続くためその全貌は不明だが、現状で南北 3.0 m以上、東西 2.5 m以上の規模を確認している。主軸方向はＮ－43°－Ｅ。南壁に沿って南北 1.0 mのベッド状遺構を設けるが、東側は鈎状に掘り下げており、やや歪な形状を呈する。そのさらに東側にも部分的に高まりがみとめられ、ベッド状遺構の可能性が想定されるものの、調査区外へつづくため性格は不明である。検出面から床面までは 40cm ほどであり、ベッド状遺構は床面から 10cm 程度高い。北側は攪乱による削平を受けながらも、径 0.7 m程度の柱穴を東西に計２基検出した。黒褐色土混じりのローム粘土を７cm ほど貼って貼床としており、そのうえで壁に沿って幅 10cm、深さ５cm ほど掘り込んで周溝を設けている。

１～５はすべて弥生土器である。１は甕である。口径 14.0cm。口縁部のみ残り、く字形の口縁部がやや屈曲しながら開く。口縁端部は肥厚する。２は長頸壺である。口径 15.7cm。直線気味に開き、

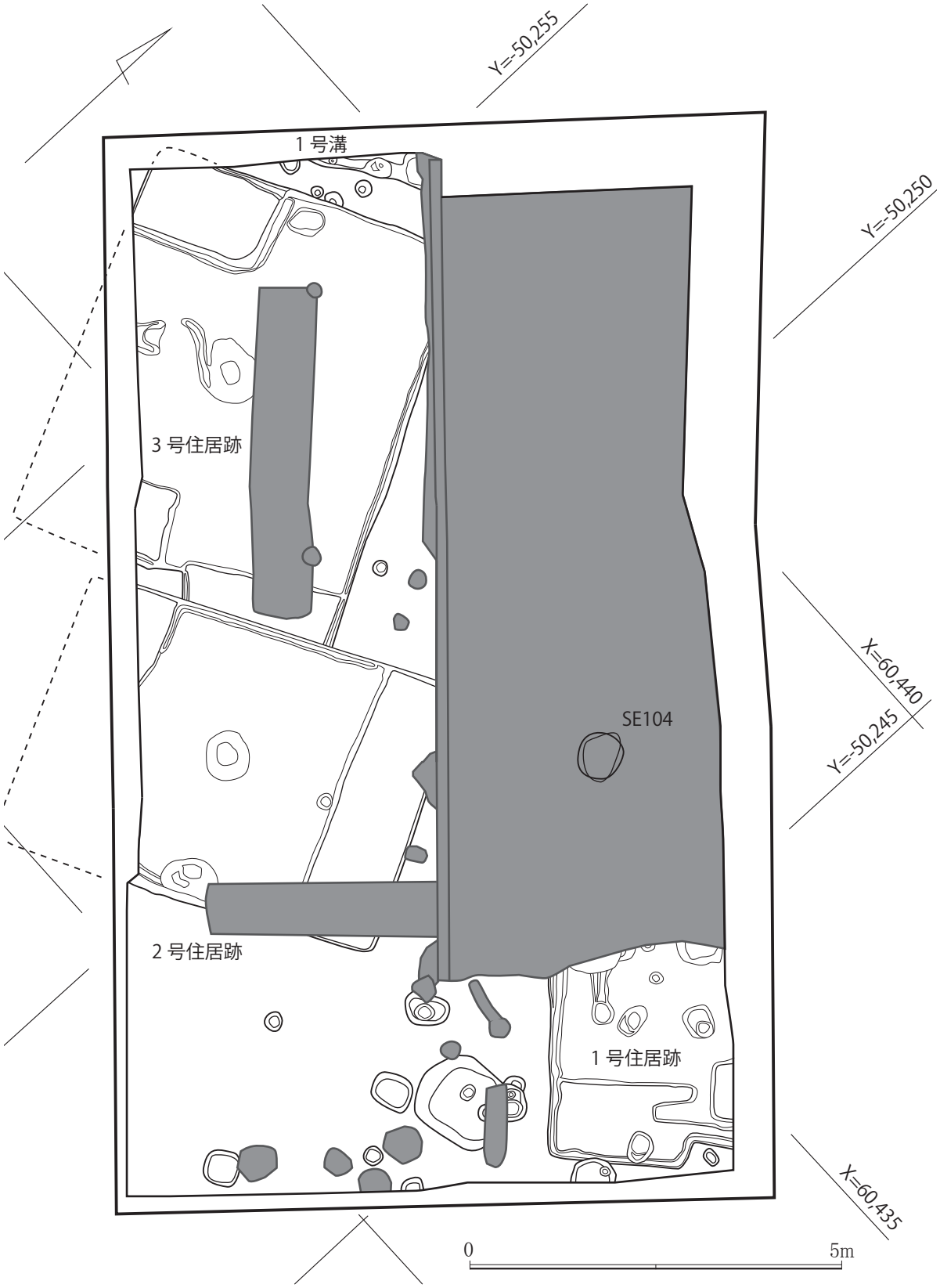


図４　遺構配置図（S= １／ 80）

口縁端部内面はやや厚みを減じる。内面に指頭圧痕が残る。３は碗である。外面下半部は大きく剝落する。外面を縦ハケ､内面を横ハケで調整する。外面にはススが吸着している。４は壺の底部である。底部径 8.8cm。胴部の強く張る形態と考えられる。５は甕である。底部径 4.0cm で、外面を縦ハケ、内面を横ハケで調整する。胴部の張りは比較的弱い。

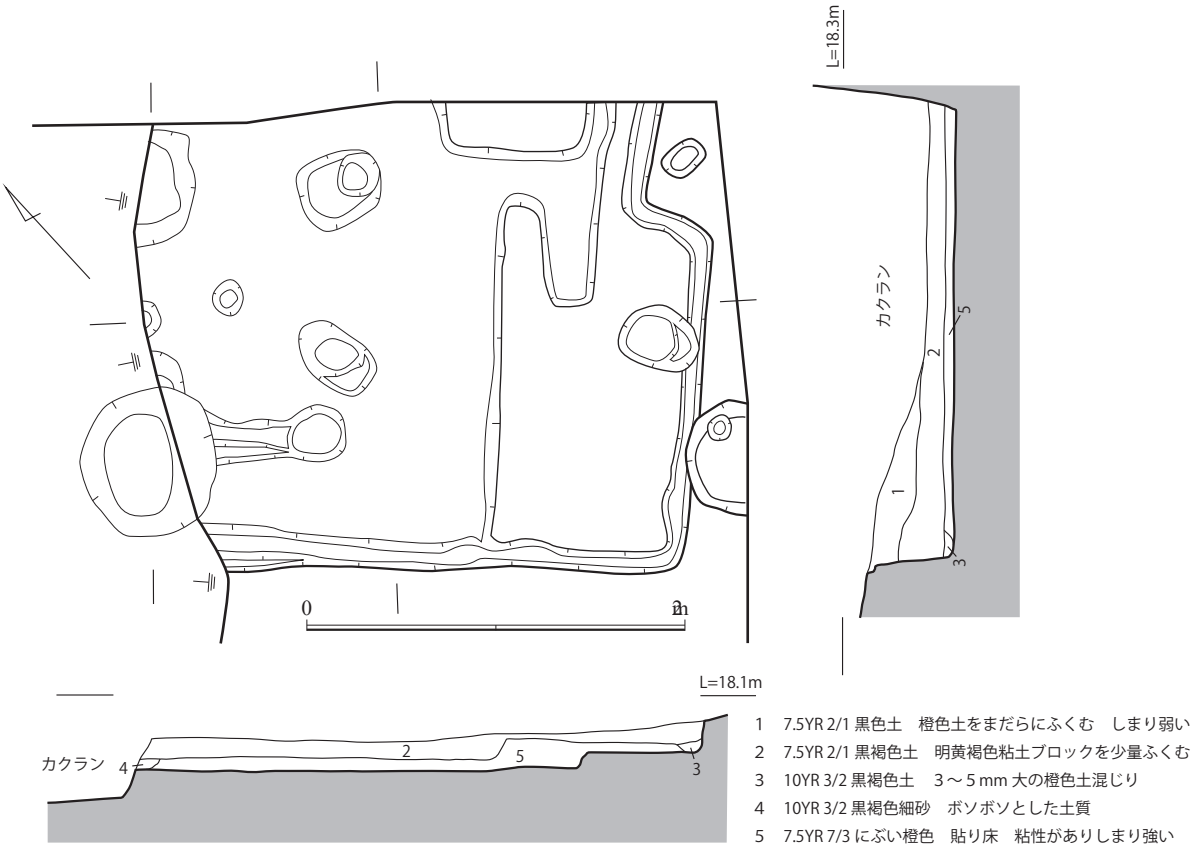


図５　１号住居（S=1 ／ 40）

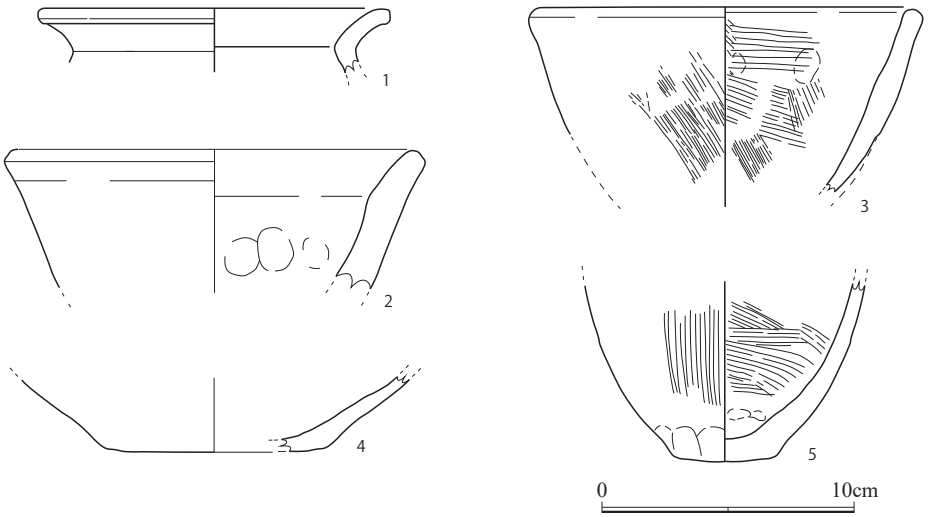
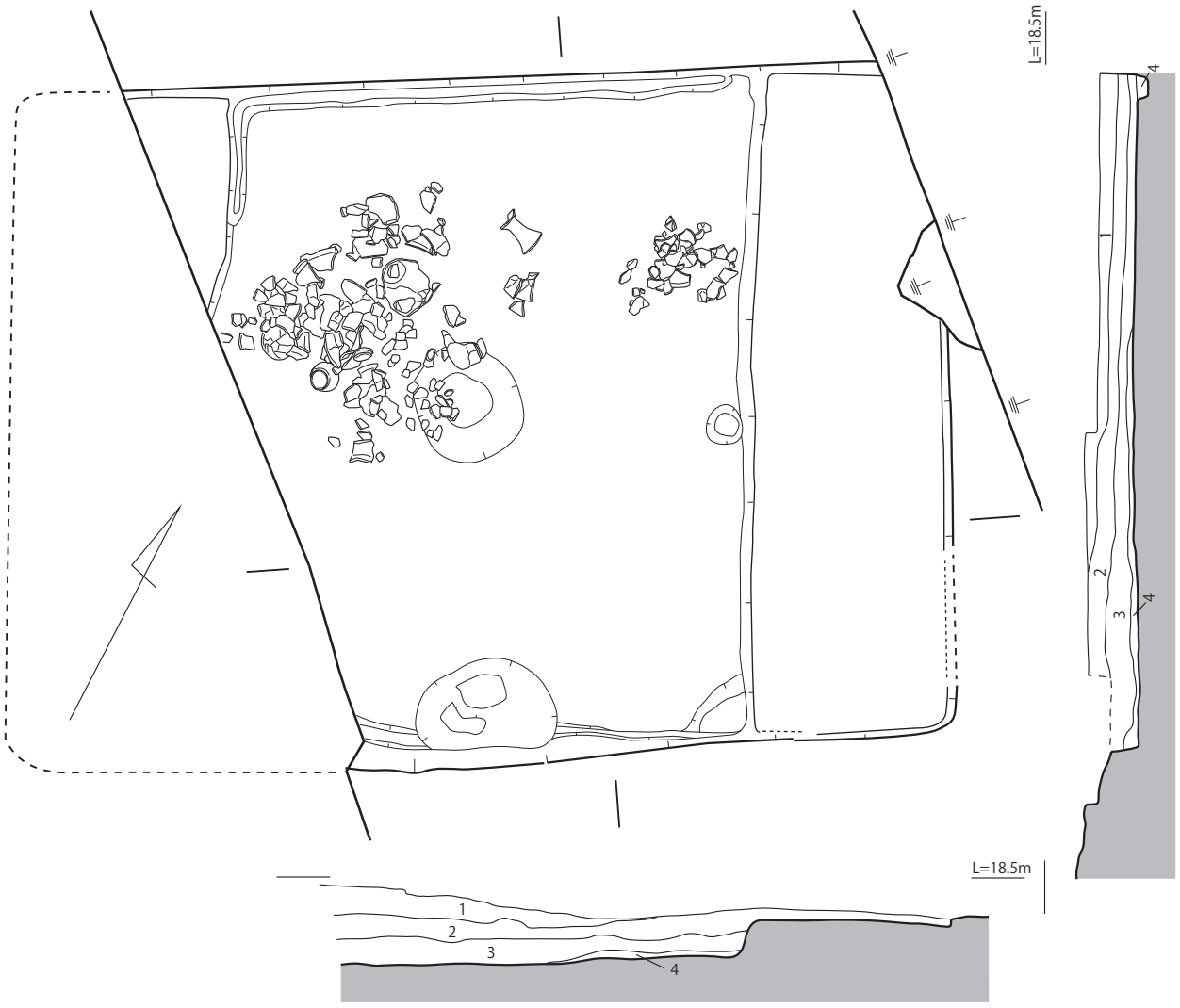


図６　１号住居出土遺物（S= １／３）

（2）2号住居

２号住居は調査区中央西側で検出した。北東隅が攪乱に切られており、西側は調査区外へと続くが、南北 3.8 m、東西 5.7 m程度の大きさと想定している。なお西壁付近に大きなコンクリート片が埋まっており、安全に除去することが困難であったためその近辺は未掘となっている。主軸方向はＮ－ 62°－Ｅである。東壁に沿って幅 1.4m ほどのベッド状遺構を設けるほか、西側にも同様の高まりがみられ、平面プランを鑑みるに東側と平行することが予想される。検出面から床面までは約 25cm、ベッド状遺構の高さは床面から 15cm 程度を測る。１号住居と同様にロームブロックを用いて 10cm ほどの貼床を施し、そのうえから幅 10cm、深さ３～７cm の壁溝を掘削する。住居中央では深さ 10cm 程度の浅い土坑を検出したが、柱穴とは思われず、遺物もほとんど出土しない。また南壁中央には深さ 30cm の土坑がみとめられる。内部には少量の遺物と比較的平坦な面をもつ 20cm ほどの石が据えられており、梯子基底として用いた可能性がある。遺物は土器を主体としてコンテナ２～３箱分に及んだが、なかでも中央付近で完形ないし原位置で破砕したと思われる個体を多数発見



1　5YR 2/1 黒褐色細砂　わずかに赤褐色土ふくむ　しまり弱い
2　7.5YR 3/2 黒褐色細砂　明黄褐色粘土混じり
3　10YR 4/2 灰黄褐色細砂　赤褐色土混じり
4　2.5Y 4/1 黄灰色細砂

図７　２号住居（S= １／ 40）

した。また南壁付近の床面近くでガラス玉１点を発見した。周囲の土を持ち帰って篩にかけたが他には見つからなかった。

６～76 は弥生土器である。６は複合口縁壺の口縁部から頸部にあたる。頸部は比較的短く、明確な屈曲点をもたず緩やかに内湾する。頸部と胴部の接合部はなだらかで屈折は比較的弱い。頸部外面に縦ハケを施す。７は複合口縁壺である。口縁部は緩やかに内湾しながら端部に至る。頸部はまっすぐに立ち上がり、そこから袋状口縁部にかけて強く外反する。頸部と胴部の境界部には突帯が１条めぐる。８は複合口縁壺である。口縁部から頸部にかけて遺存し、口径 22.6cm、最大径 27.0cm となる。外面は縦ハケを主体としつつ局所的に横ハケもみられる。内面は頸部上半に横ハケ、下半にナデの痕跡が残る。９は壺である。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部にかけてやや外側に開く。器厚が 1.2～1.5cm と比較的厚い。外面は横方向のタタキ、内面はナデ成形をおこなう。口縁端部には面取りを施す。10 は複合口縁壺である。口縁径 17.2cm。袋状口縁部は丸みを持ちながらすぼまる。頸部は内湾するものの、比較的緩やかにすぼまる。11 は複合口縁壺である。口縁径 19.6cm。袋状口縁部は丸みを持ちながらすぼまる。12 は複合口縁壺である。口縁部から頸部まで残る。袋状口縁部はわずかに内湾しながらすぼまり、端部を面取りする。頸部は朝顔形に開き、明確な屈曲点をともなわない。頸部の器厚は約 1.3cm で大きく変化しない。内外面ともに縦ハケで調整する。13 は複合口縁壺である。口縁端部のみ遺存しており、口径 17.2cm、最大径 21.0cm を測る。14 は壺の頸部である。頸部は外反ぎみに開く。幅１cm ほどの突帯を貼り付け、薄い板状工具で斜行方向に刻目を施す。胎土に大粒の石英をふくむ。15 は甕である。口径 19.6cm、残存高 9.0cm。胴部が強く張る形態で、頸部から口縁部はごく短小で若干外反する程度である。外面は縦ハケ、内面は横ハケで調整する。16 は壺である。胴部から頸部にかけて遺存しており、括れ部には突帯を１条つまみ出す。17 は壺である。胴部最大径の部分に突帯を貼り付けたもので、突帯上面には列点文を細かく施している。外面は胴部下半に縦ハケ、内面は横ハケをおこなう。胴部径 32.2cm。18 は壺の胴部である。最大径の位置に１条の突帯を貼り付け、刻目を加える。外面は縦ハケ、内面は横ハケで、両者はハケの目の密度が異なる。胴部径 40.0cm。19 は壺である。頸部径 15.2cm、残存高 10.5cm。頸部から口縁部は直線的に広がる。胴部上半には二条の突帯をめぐらせる。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。20 は壺である。丸底で内外面ともに縦ハケを施す。21 は甕の口縁部である。口径 24.6cm。口縁端部は丸みをもって肥厚する。内面に縦ハケを施す。22 は無頸壺である。口径 23.1cm、残存高 7.2cm。胴部の張りは比較的弱い。口縁端部は貼り付けによりわずかに肥厚する。23 は壺である。底部は平底で径 9.9cm。胴部にかけて大きく開く形態をとる。外面は縦ハケ、内面は横ハケが主体をなす。24 は壺の底部である。外面は縦ハケで成形する。胴部は強く張る。底部径 8.3cm。25 は壺である。頸部から胴部にかけて遺存し、頸部径 20.6cm を測る。胴部との接続部には一条の突帯を貼り付け、等間隔に斜行する刻目を施す。頸部内面は横ハケ。26 は壺である。丸底で胴部も丸みを帯びる。内面に横ハケをおこなう。27 は壺である。胴部から頸部にかけて遺存しており、括れ部には突帯を１条つまみ出す。突帯は張り出しがやや弱い。16 と同一個体の可能性がある。28 は壺の胴部から底部にあたる。浅い高台をもち、底部径 6.0cm を測る。胴部最大径は 21.0cm。29 は甕である。口径 24.0cm。口縁部はわずかに内湾するものの、ほぼ直線的に開く。30 は甕である。口径 18.0cm、頸部から直線的に立ち上がる。外面は縦ハケ。31 は甕である。口径 24.8cm。口縁部は喇叭状に外反しながら開く。32 は甕である。口径 8.7cm で、頸部から口縁部までの立ち上がりはおおむね垂直である。33 は甕である。口縁部から胴部上半までが残る。内外面ともに縦ハケで調整しており、外面にはススが吸着している。口径 22.8cm。34 は甕である。口径 12.2cm、残存高 7.3cm。口縁部が直線的に開き、

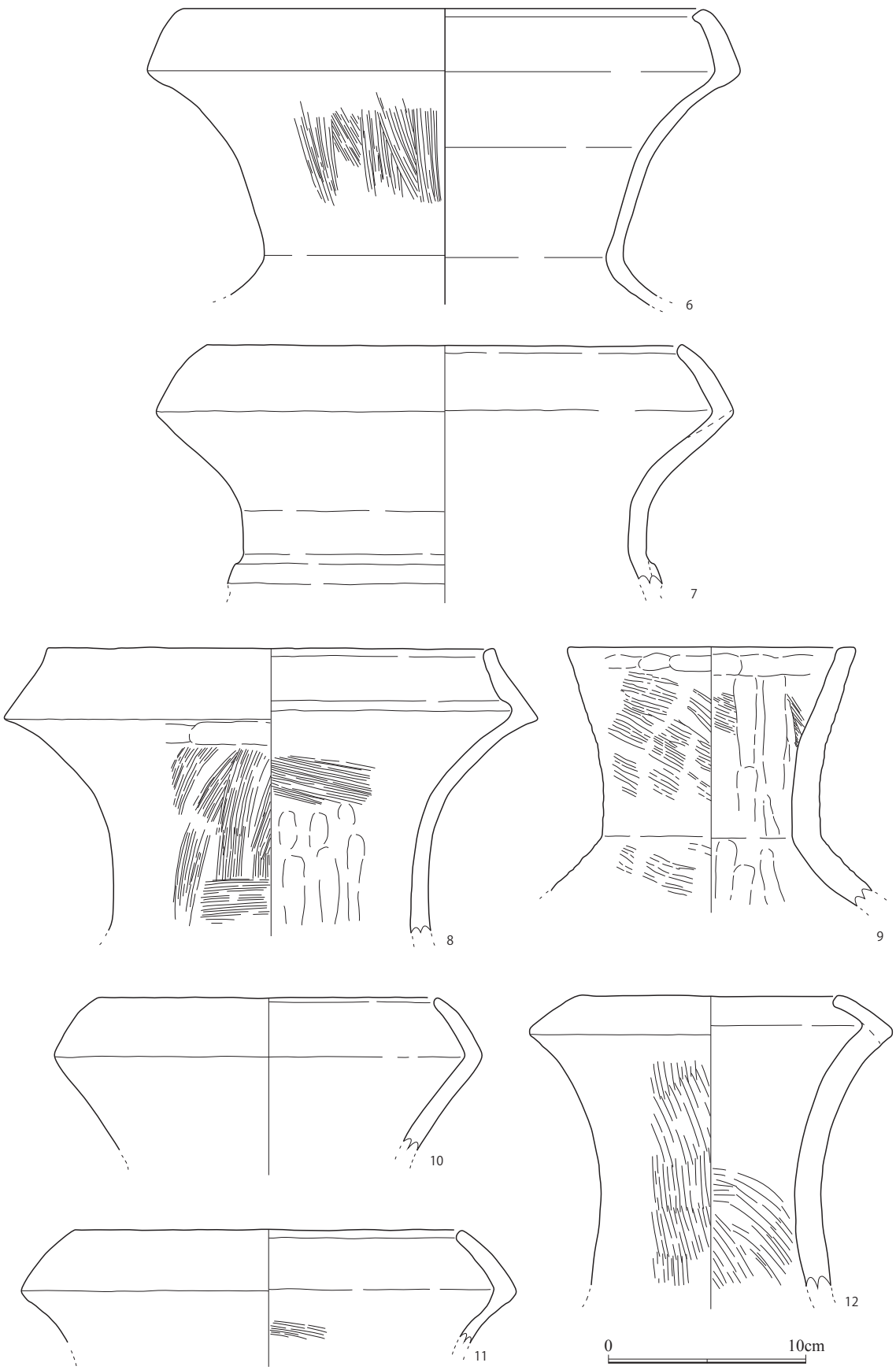


図８　２号住居出土遺物（Ｓ＝１／３）

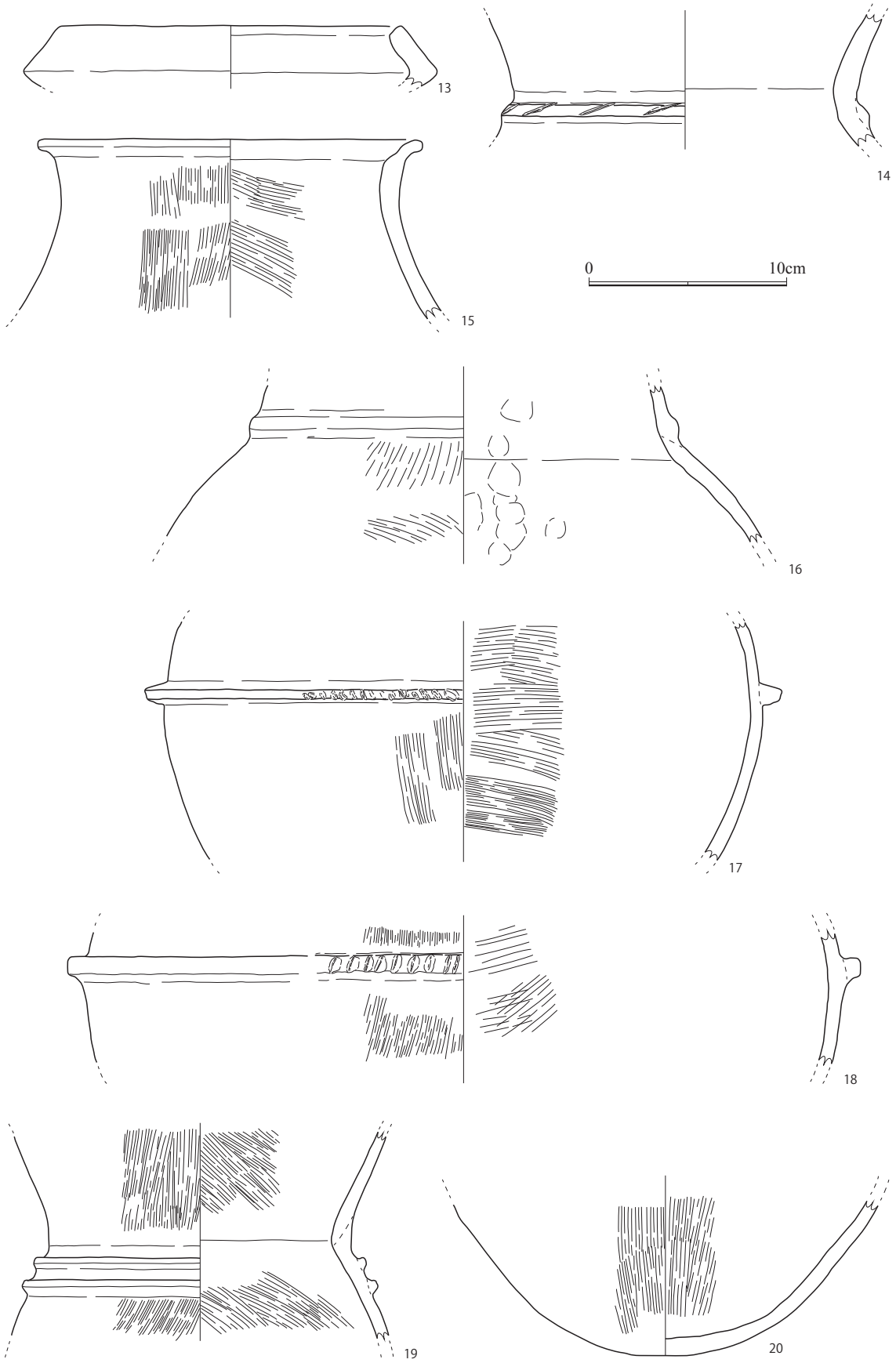


図９　２号住居出土遺物（S= １／３）

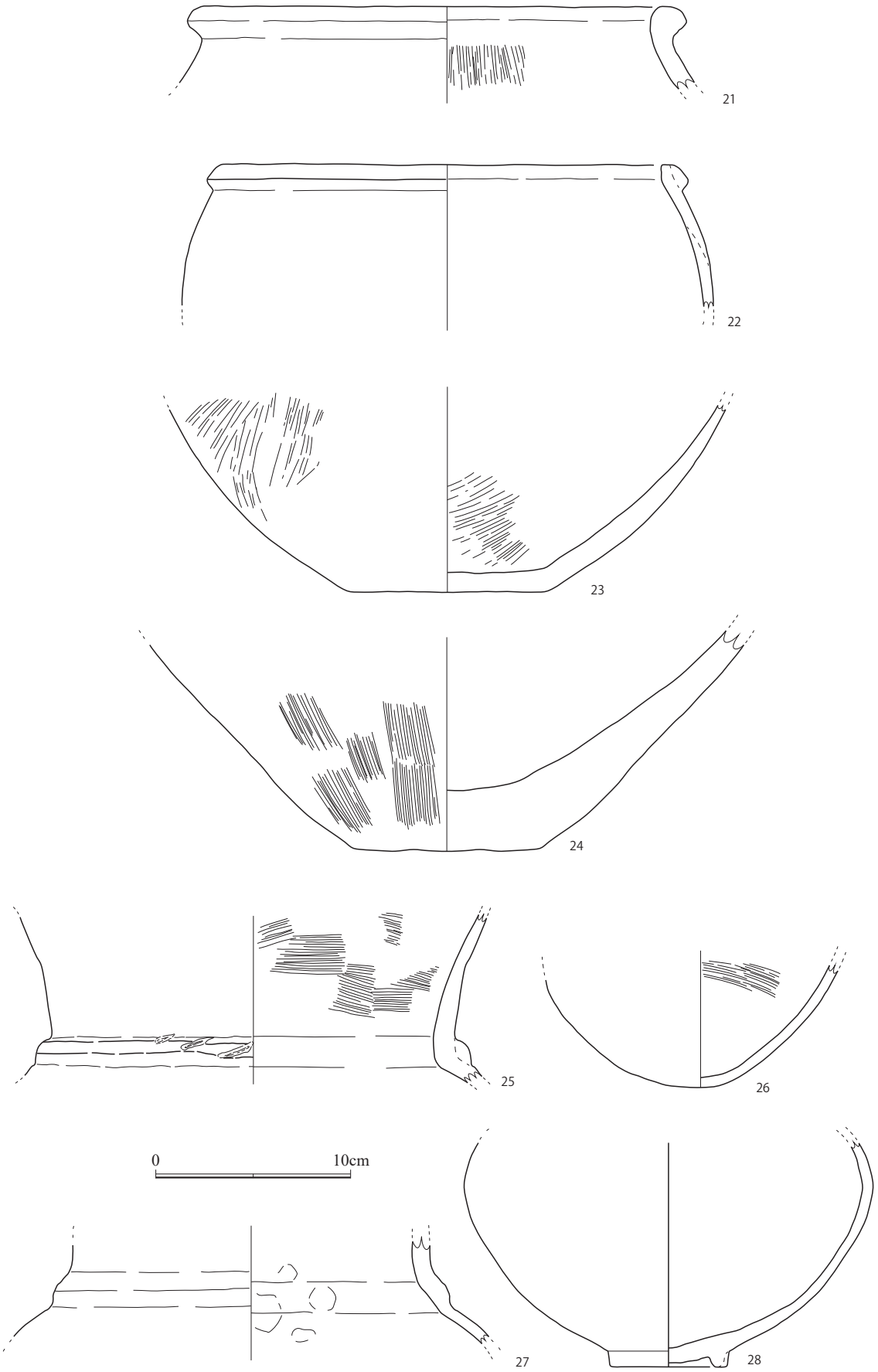


図 10　２号住居出土遺物（S= １／３）

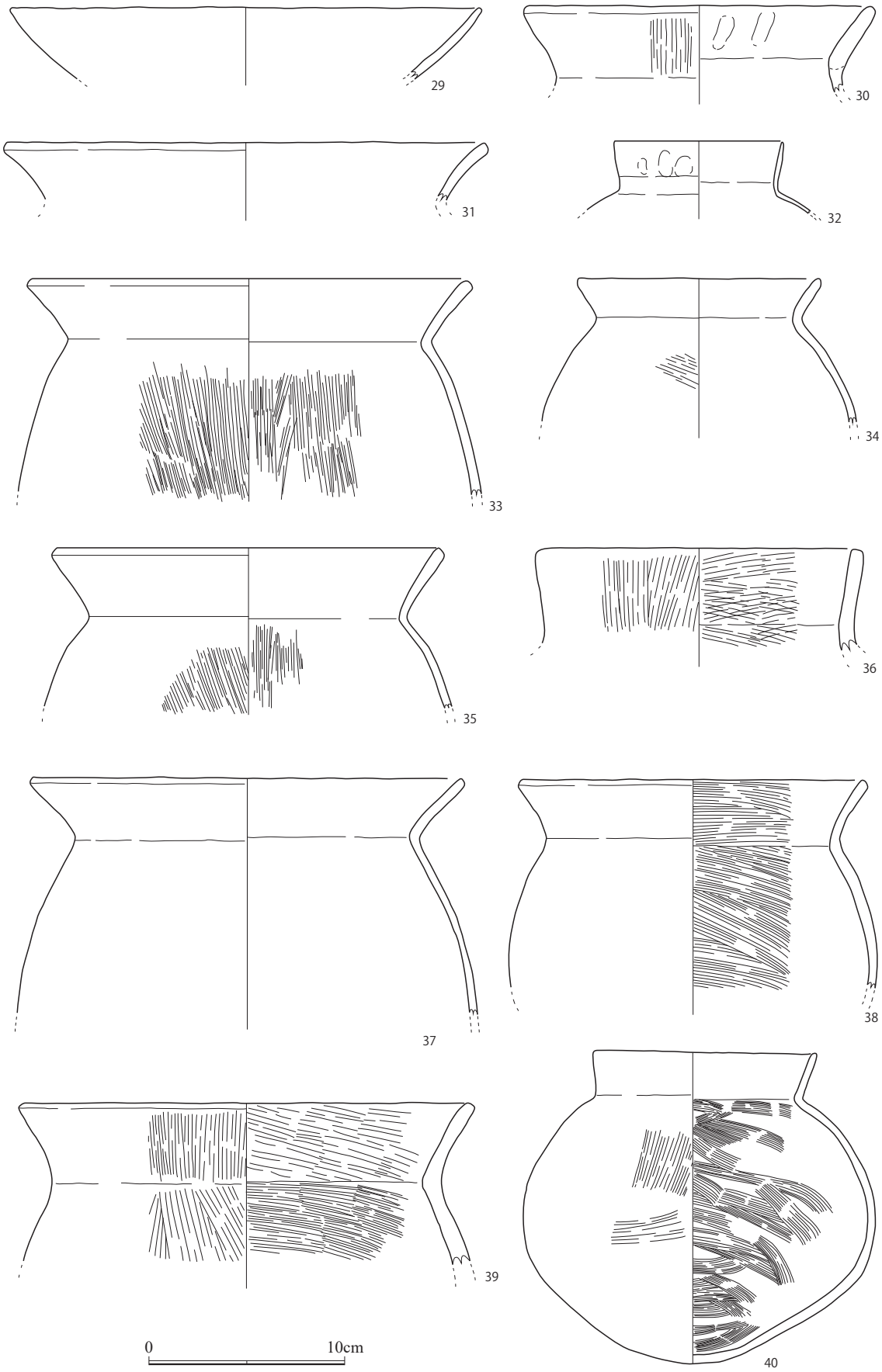


図 11　２号住居出土遺物（S= １／３）

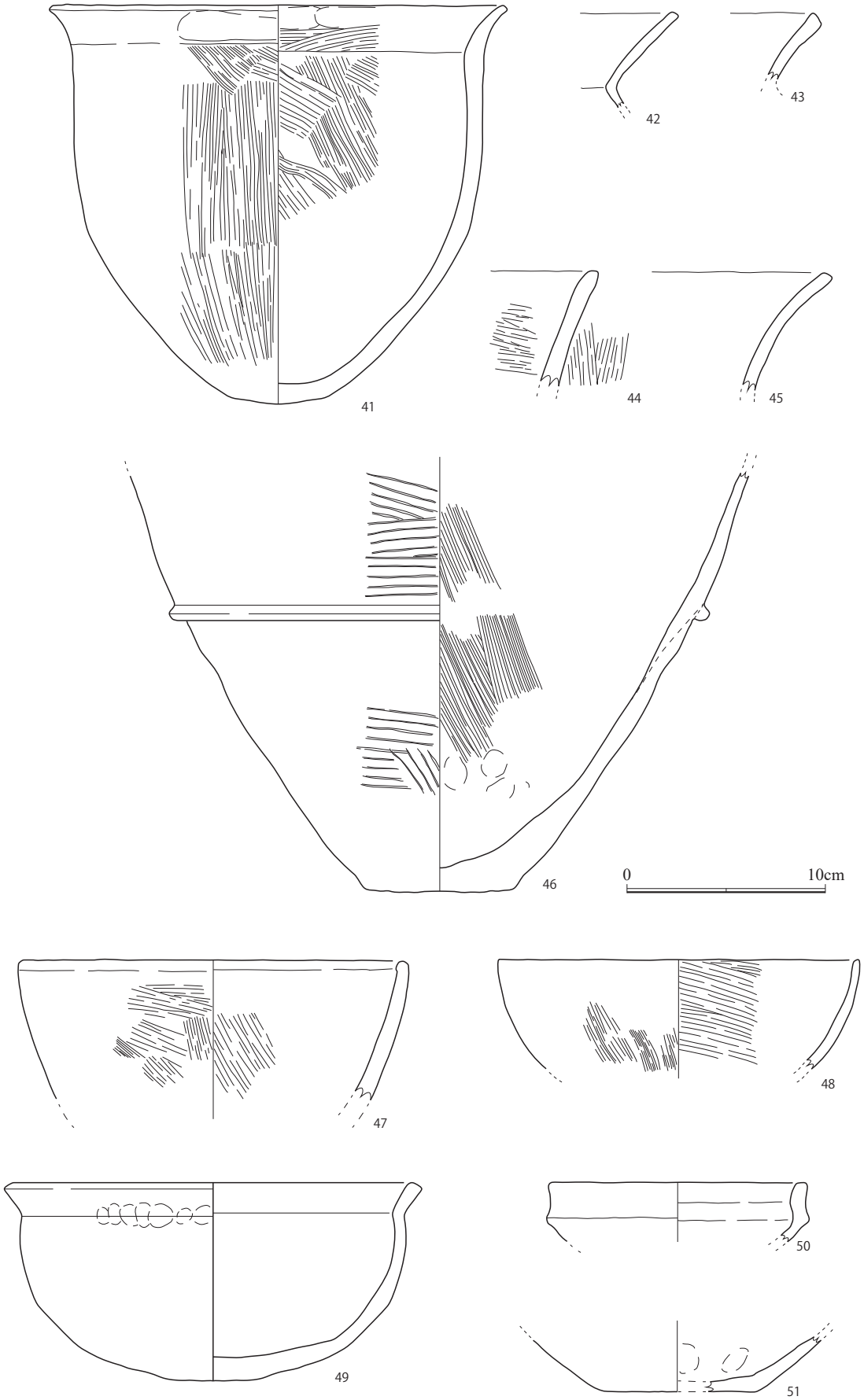


図 12　２号住居出土遺物（S= １／３）

胴部の張りがやや強い。内外面ともにナデ調整が主体であるが、外面の一部にハケ調整がみとめられる。胎土に２～３mm 大の石英粒をふくむ。35 は甕である。口縁部から胴部上半まで残り、内外面ともに縦ハケがみられる。口径 20.0cm。36 は甕である。口径 16.8cm で頸部からほぼ直立に立ち上がる。外面は縦ハケ、内面は横ハケ。37 は甕である。口縁部から胴部上半にかけて遺存する。口径 22.2cm、頸部径 17.6cm、残存高 12.0cm。口縁部は直線的に開く。内外面ともにナデ調整をおこなう。38 は甕である。口縁部から胴部上半にかけて遺存する。口径 17.9cm、頸部径 15.0cm、胴部径 19.0cm、残存高 10.6cm。口縁部はわずかに外反する。内面は横ハケを密に施す。外面はナデ調整。39 は甕である。口径は 23.1cm を測り、胴部径も口径と同程度であろう。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。40 は甕である。口径 11.5cm、胴部径 18.1cm、器高 16.0cm。頸部から口縁部の立ち上がりは直線的。胴部は張りの強い形態をとる。内面は横ハケで細かく調整しており、底部から頸部までススが吸着している。外面縦ハケ。41 は甕である。口径 23.0cm、器高 20.1cm。丸底で胴部から頸部にかけてまっすぐに立ち上がり、口縁部は緩やかに開く。外面は縦ハケ、内面は斜行方向のハケで調整し、口縁端部はナデ成形する。42 は甕の口縁部である。口縁部はく字形で、頸部から直線的な立ち上がりをみせる。43 は甕である。口縁部はく字形で口径は不明。44 は甕である。外面は縦ハケ、内面は横ハケ。口径不明。45 は甕である。口縁部が緩やかに外反する。小片のため径は不明。46 は甕である。胴部下半に突帯を１条貼り付ける。外面を横ケズリ、内面を縦ハケで調整する。底

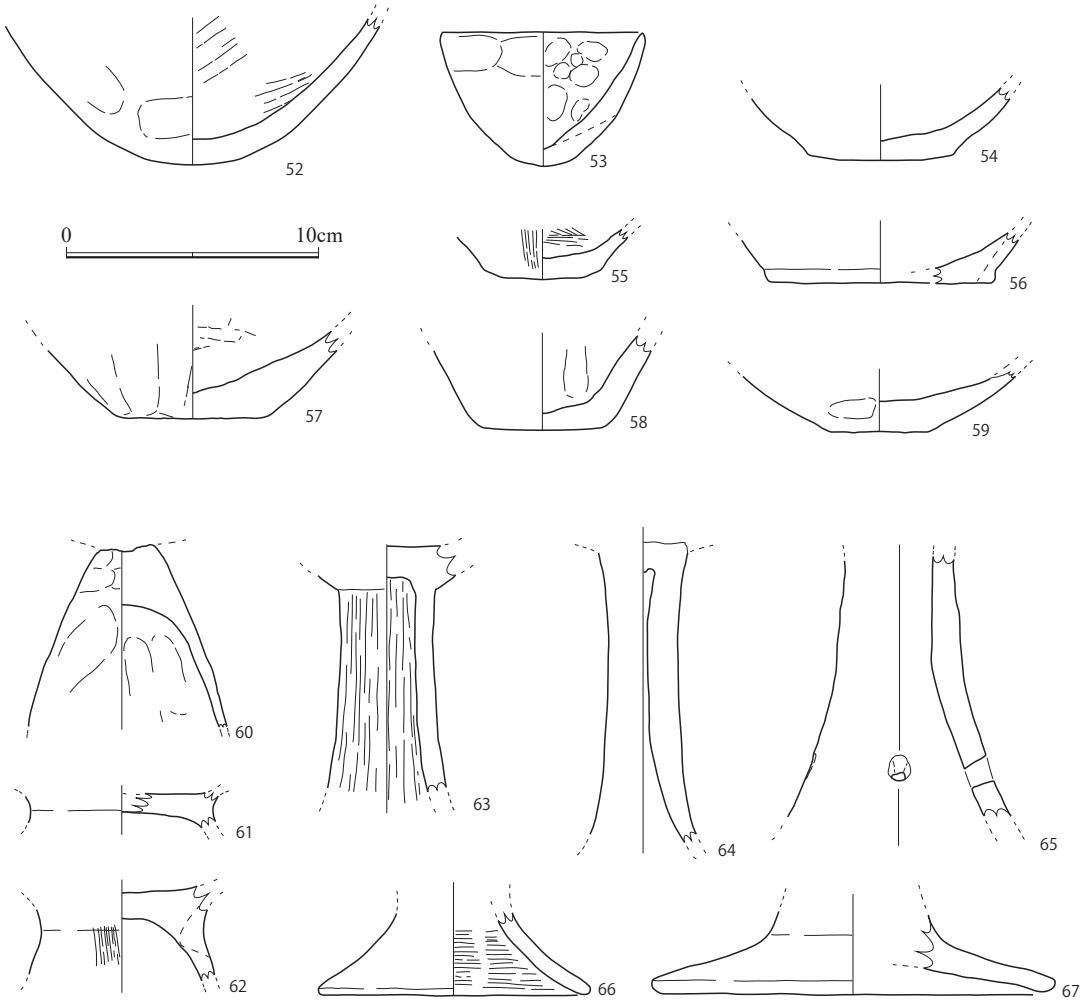


図 13　２号住居出土遺物（S= １／３）

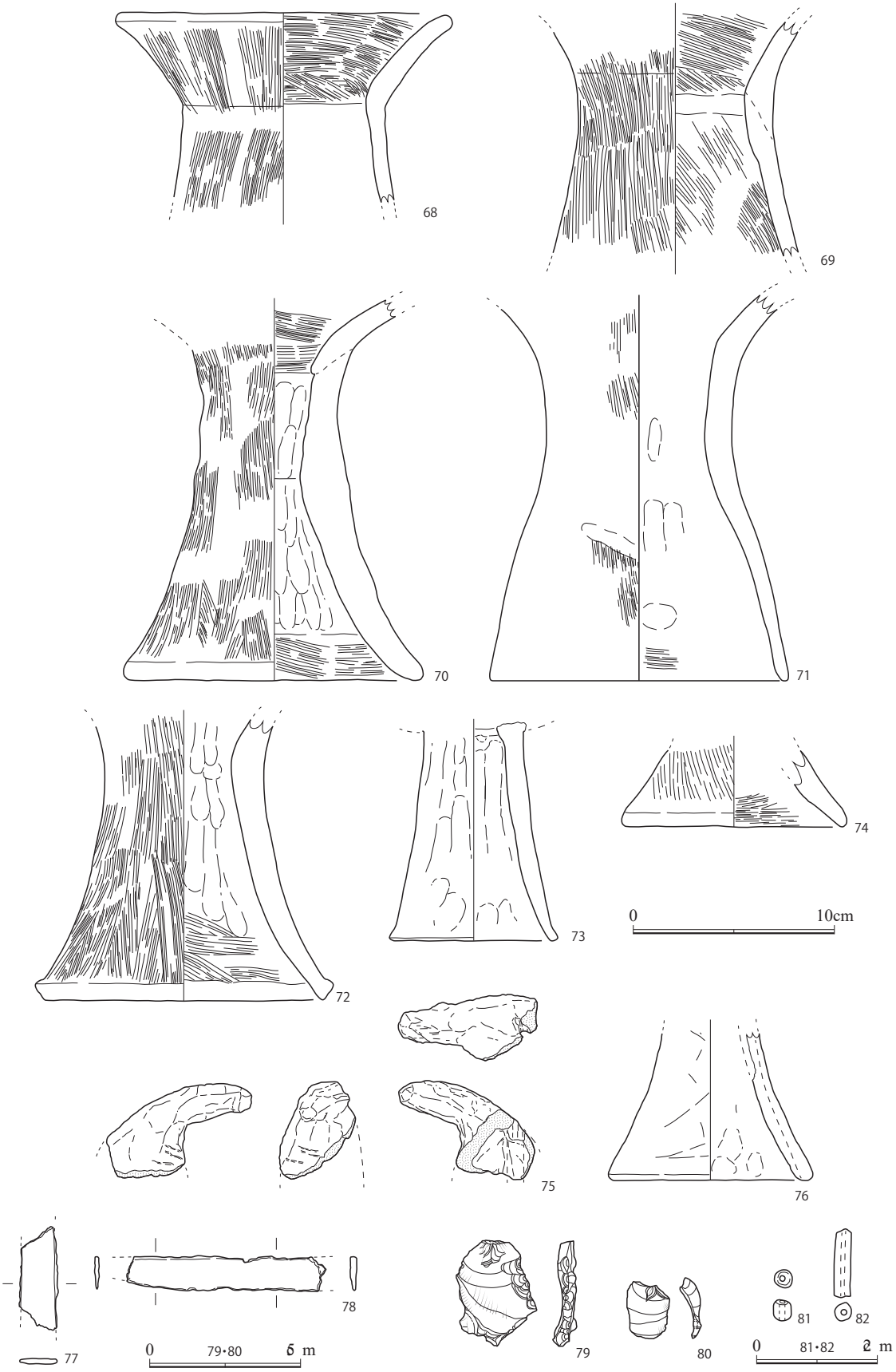


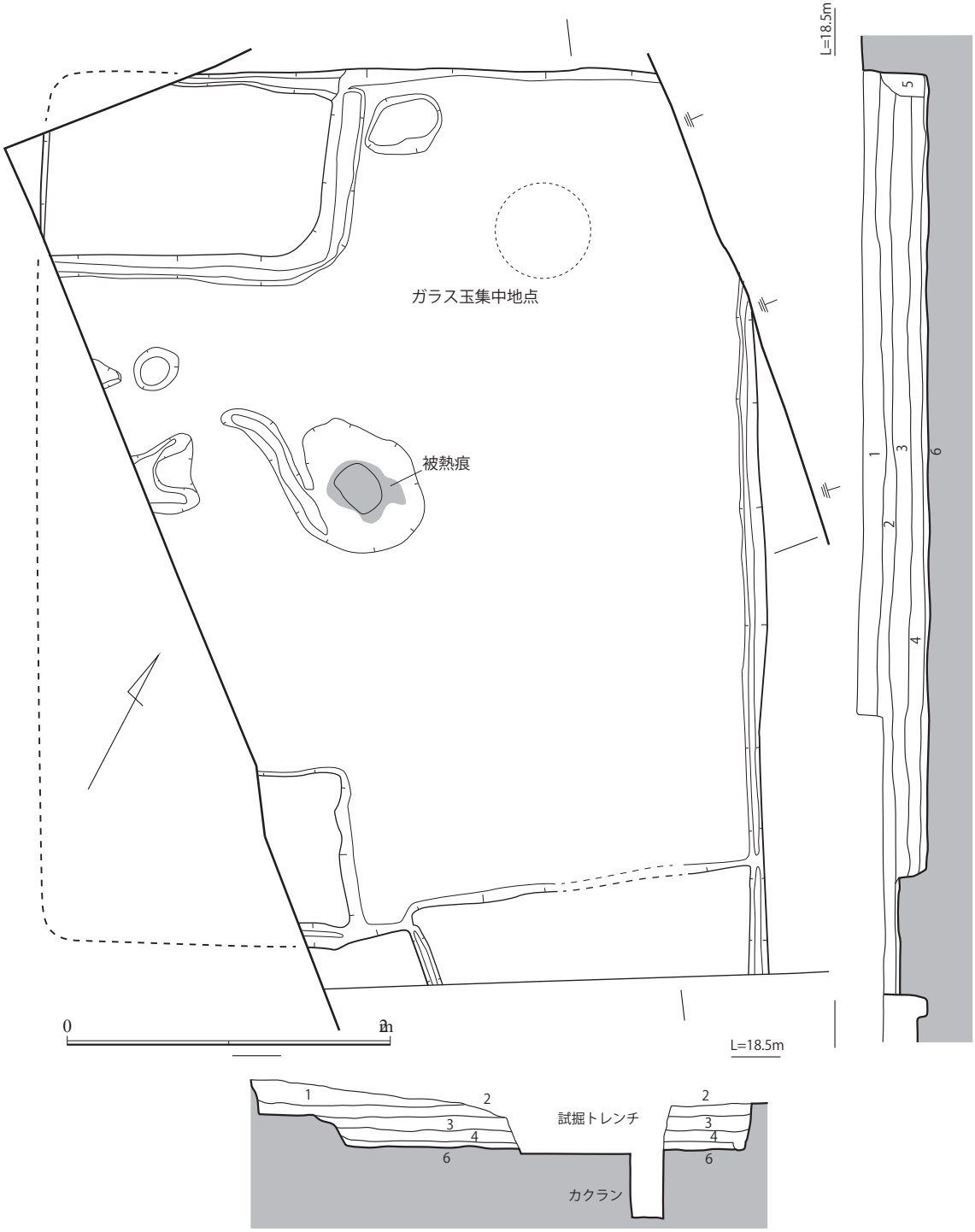
図 14　２号住居出土遺物（S= １／１・２・３）

部径 7.4cm。47 は碗である。口縁部まで緩やかに内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに肥厚する。内外面ともにハケ調整。48 は碗である。口径 18.2cm。外面は縦ハケ、内面には横ハケをもちいる。内面のハケ工具は外面と比べて目の間隔が広く、それぞれ異なる工具を使用する。49 は小型甕である。ごく短い頸部をもち、半円球状の胴部が取り付く。手づくねによる成形で底部や口縁部には歪みも生じている。口径 20.8cm。50 は高坏である。口縁部は複合口縁壺のように屈折し、わずかに内湾しながら端部に至る。51 は壺の底部である。平底で底部径 8.0cm。内面に指頭圧痕がみられる。52 は壺の底部である。丸底の外面はナデ調整。内面は幅の広い工具で掻き取って調整する。53 は碗である。口径 8.1cm、器高 5.8cm。全体に手づくねで成形する。54 は甕である。平底で底径 5.6cm。55 は壺の底部である。レンズ底で底部径は 4.5cm。56 は甕である。平底で底部径 9.1cm。57 は壺である。平底で底部径 5.4cm。内外面をケズリで調整している。58 は甕である。底部のみ遺存しており、底径 5.0cm を測る。59 は壺の底部である。底部径は 4.0cm。60 は高坏の脚部である。内外面ともに指ナデによって成形しており、内面は滑らかな器面をみせる。67 と同一個体の可能性がある。61 は高坏である。括れ部にあたる部位だが、上下の情報はほぼ欠落している。62 は高坏である。脚部の上半部のみ残る。63 は高坏である。脚部が細長くのびる形態で、裾はあまり開かない。外面は縦方向のミガキを施し、内面は径 1 cm 程度の棒状工具で成形する。64 は高坏の脚部である。高く直線的に立ち上がり、裾は喇叭状に広がる。脚内部は中空。65 は高坏の脚部である。下半部に棒状工具で穿孔をおこなう。穿孔は 4 か所みられるが、割付は厳密でなく 90 度ずつ配置されているわけではない。穿孔は焼成前に施される。66 は高坏の脚部である。裾は緩やかな弧を描いて立ち上がる。内面に横ハケがみとめられる。67 は脚部である。底部径 16.0cm で裾は浅い角度で広がり、脚柱部で強く屈曲して上方へのびる。68 は器台である。主に上半部が遺存しており、口径 16.8cm、残存高 9.4cm。外面は縦ハケ、内面は括れ部より上を横ハケ、下をナデで整える。69 は器台である。括れ部は径 9.7cm。上半部のほうが強く開く。外面は縦ハケ、内面は横ハケを用いる。70 は器台である。底径 14.8cm、残存高 18.9cm で、括れ部から上半は強く外反する。外面は縦ハケ、内面は中ほどをナデ成形し、底部および上半部は横ハケで調整する。71 は器台である。中央よりやや高い位置に括れをもち、底部の裾は緩やかに開く。外面は縦ハケを細かく入れて調整する。72 は器台である。底径 13.8cm、残存高 14.0cm。外面は縦ハケ。内面はナデ成形だが、端部に近い部位では横ハケで調整する。73 は高坏である。裾は外へむかってやや開く。内外面ともにナデ成形。底部径 10.4cm。74 は高坏の脚部である。脚部は比較的短く、裾はわずかに外反するがおおむね直線的に開く。外面は縦ハケ、内面は横ハケ。75 は支脚である。残存高は 4.9cm で上半部が遺存する。脚部内面は中空で、焼成前に上面に径 1 cm ほどの穿孔を施す。先端は嘴状に屈曲しながらのび、上面が被熱により変色している。外面はタタキ調整を施す。西部瀬戸内地域の形態的特徴を示すものである。76 は支脚か。底部径 10.2cm で上方へ向かって緩やかにすぼまる。器厚は 1.2cm 程度を測る。外面にタタキ調整がみられる点で 75 と類似しており、同一個体の可能性もある。77 は残存長 5.1cm。刀子の刃部のようであるが、断面では両端の厚みが同程度であることから両側縁に刃付けをおこなっているとみられ、ミニチュア鉄剣の可能性も考えられる。78 は刀子。基部から刃部にかけて幅が狭まる部位にあたる。79 は黒曜石の剥片である。最大長 3.5cm、最大幅 2.6cm。どちらの主面にも剥離の痕跡がみとめられる。80 は黒曜石の剥片である。最大長 2.0cm、最大幅 1.4cm。一方の主面に自然面を残す。81 はガラス小玉である。直径 3 mm、最大長 3 mm。孔は径 1 mm。色調は淡青色。82 は管玉。全長 1.1cm。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

（3）3号住居

3号住居は調査区北西側に位置する。四隅はすべて調査区外へ続いたり遺構や攪乱に切られるが、南北 6.2 m、東西 4.5 m程度の規模と推定される。南側は2号住居に切られており、3号住居のほうが古い。南壁は東側2mほどが張り出す。主軸方向はN－27°－Wで、長軸方向は異なるものの



1　7.5YR 5/2 灰褐色細砂　暗褐色土混じり
2　10YR 5/2 灰黄褐色細砂　1 cm 大の赤褐色土ふくむ
3　7.5YR 4/1 褐灰色細砂　5 mm 大の赤褐色土混じり
4　5YR 4/1 褐灰色細砂　1 cm 大黄褐色土混じり
5　10YR 2/1 黒色細砂　黄褐色・黒褐色土ふくむ
6　7.5YR 6/4 にぶい橙色粘質土　ロームに黒褐色土混じり

図 15　3号住居（S= 1／40）

２号住居とほぼ平行する位置関係となる。検出面から床面までは約 35cm で、ローム主体の貼り床を 5 cm 程度敷く。西壁には南北に 1 基ずつベッド状遺構が設けられ、互いに平行する。北側のベッド状遺構は東西 1.7m、南北 1.1m で床面から 20cm ほど高い。南側の張り出し部も同様に床面から 15cm ほど高く、ベッド状遺構の可能性もあるが、建物入口のステップにあたると考えることもできよう。北側のベッド状遺構の北壁側と床面に壁溝を設ける。土層断面を観察すると、壁から内側 15cm ほどに黒色土が堆積しており内側の様相とやや異なるため、板など有機質製の構造物を溝に沿って巡らせたことがうかがえる。建物中央には円形のくぼみと、そこからのびる溝状の掘り込みを確認した。深さ 10cm ほどのくぼみの内部は部分的に赤変しており炉跡かと思われたが確証を得ない。

遺物は弥生土器や黒曜石のほか、建物北寄りでガラス小玉が集中的に出土した。原位置では確認できなかったが、掘削していた作業員によれば数個体が並んで見えたといい、糸に通した状態で埋没した可能性がある。

83 ～ 89 は弥生土器である。83 は甕である。頸部から口縁部にかけて直線的にひらく。口径 26.0cm。84 は複合口縁壺である。袋状口縁部から口縁部の立ち上がりが浅く、外側へ向かって強く張り出す印象を受ける。85 は甕である。口頸部は短く、内面に強く張り出している。86 は壺である。レンズ底で底部径 4.6cm。87 は壺である。口縁部はく字形を呈し、頸部に断面三角形の突帯を貼り

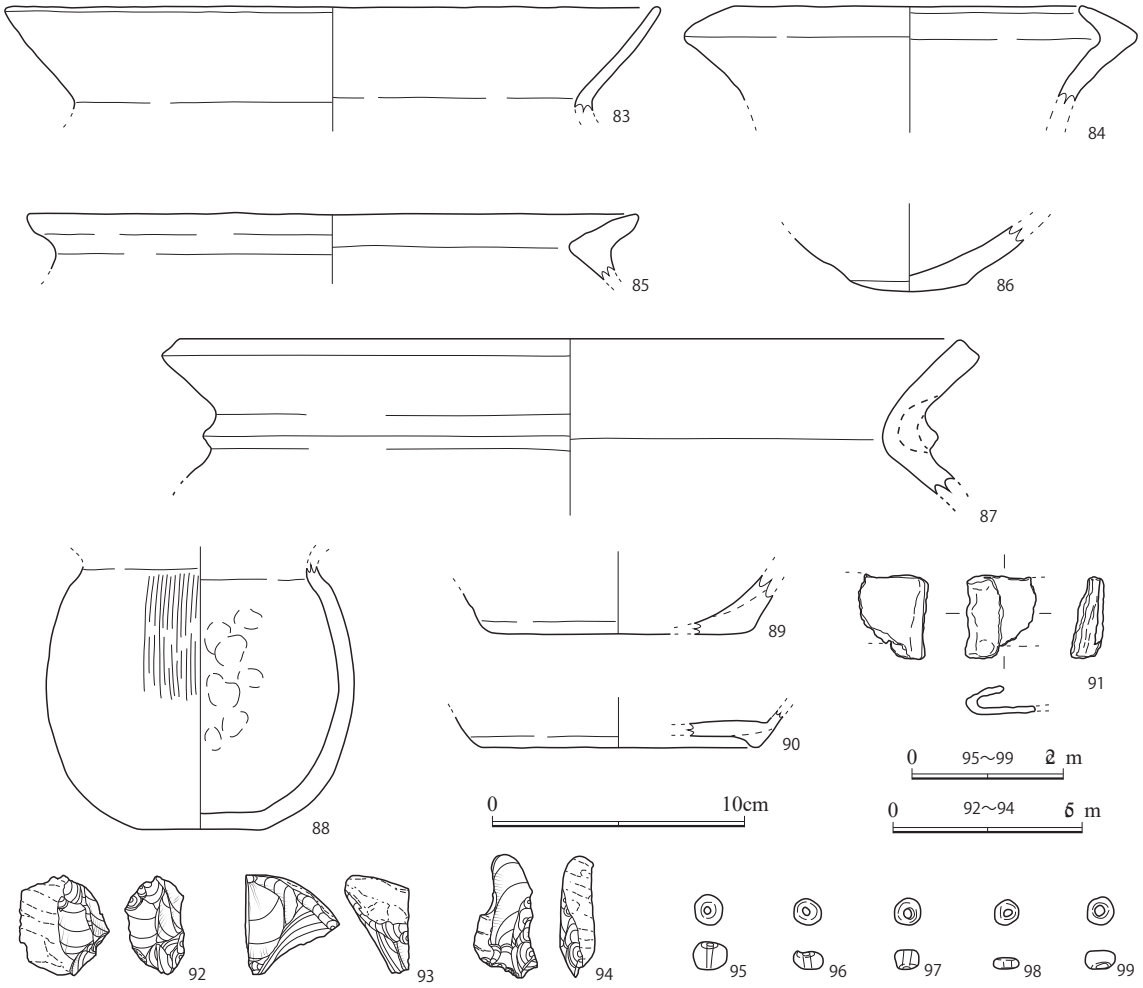


図 16　３号住居出土遺物（S= １／１・２・３）

付ける。88 は小型甕である。底部は平底で径 5.0cm。胴部は球形に近く径 12.2cm を測る。外面は縦ハケ。89 は壺である。平底で底部径 8.6cm。90 は須恵器の坏身である。底部のみ遺存しており、底部径 11.0cm、残存高 1.5cm。高台は低脚で断面三角形である。色調は灰白色で焼成はやや軟質。91 は鉄鎌の基部。全長 3.3cm、残存幅 2.7cm、最大厚 1.2cm。折り返し部は図下側が 0.8cm の間隙を空けるのに対して、図上側はほぼ接合しており、斜めに折り返している。上下端部は本来の外形線を表すとみられる。92 は黒曜石の剥片である。最大長 2.6cm、最大幅 2.4cm。凸状に張り出した面には自然面が残る。93 は黒曜石の剥片である。三角形の平面形態を呈し、最大長 2.6cm、最大幅 2.7cm。一部に自然面を残す。94 は黒曜石の剥片である。最大長 3.1cm、最大幅 1.7cm。いずれの主面にも自然面を残している。95 ～ 99 はガラス小玉である。直径 3 ～ 4 mm、最大長 2 ～ 4 mm を測る。孔はいずれも径 1 mm。うち 95 ～ 97 は北側の床面で集中的に見つかった。色調は淡青色。

出土遺物および 2 号住居との切り合いから、時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

3．溝（SD）

溝は調査区北壁にかかる 1 号溝を 1 条検出した。3 号住居の北壁と平行することから当初は住居跡の可能性を想定したが、掘削してみると検出面から 5 cm ほどの深さで底を確認した。底面には凹凸が目立ち、部分的にピット状にくぼんでいる。直線的であるため溝と判断したが、北側の立ち上がりは確認していない。また住居そのものでないとしても、3 号住居に関連する遺構の可能性は考慮せねばならない。

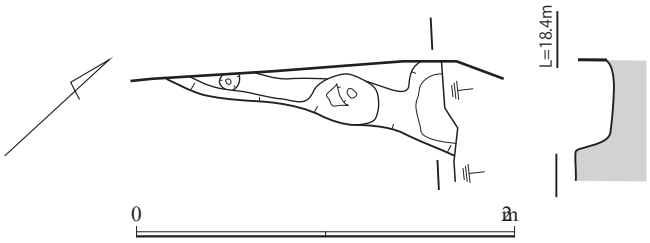


図 17　1 号溝（1 ／ 40）

4．井戸（SE）

調査区東南部で SE104 を検出した。コンクリート基礎埋設にともなう大規模な削平を受けているが、下部はその影響を免れた。全体の検出面より 0.7 mほど深くで検出し、人力で掘削を開始した。30cm ほど掘り進めるとフラスコ状にやや壁面が広がっており、さらに下方へと続いていた。しばらくは人力での作業を続けたものの、安全上の懸念から 60cm ほど掘削した段階で中断した。その後、埋戻しに際して重機で断割りを実施し、標高にして 16.6 m、全体の検出面から 1.6m 下で最深部を確認した。

人力での掘削に際して、検出面から 30c m下で完形の鉢を正位で検出した。井戸の埋没過程における祭祀行為の可能性を想定できよう。

101 は弥生土器の鉢である。全体が半球状を呈し、底部が丸底となる。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。完形。

出土遺物から、弥生時代終末期と考えられる。

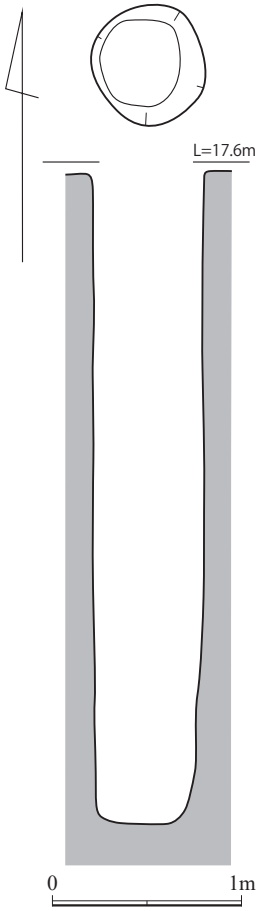


図 18　SE104（1 ／ 40）

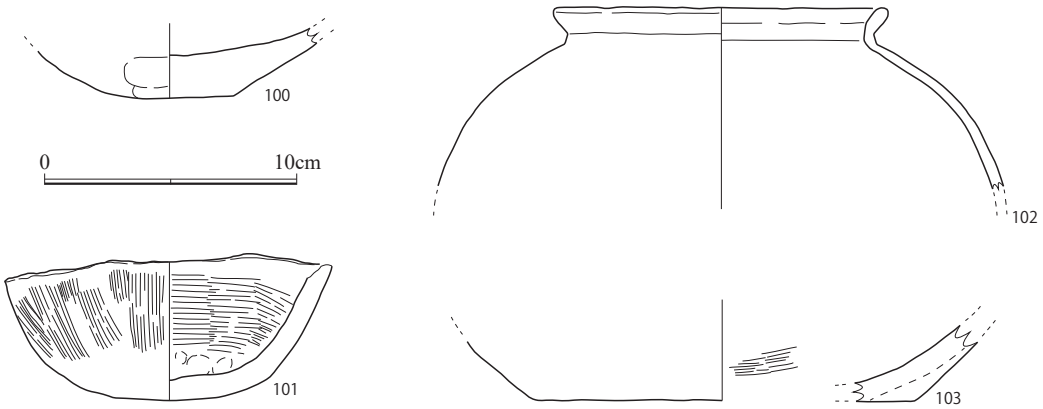


図 19　その他の出土遺物（S= 1 ／ 3）

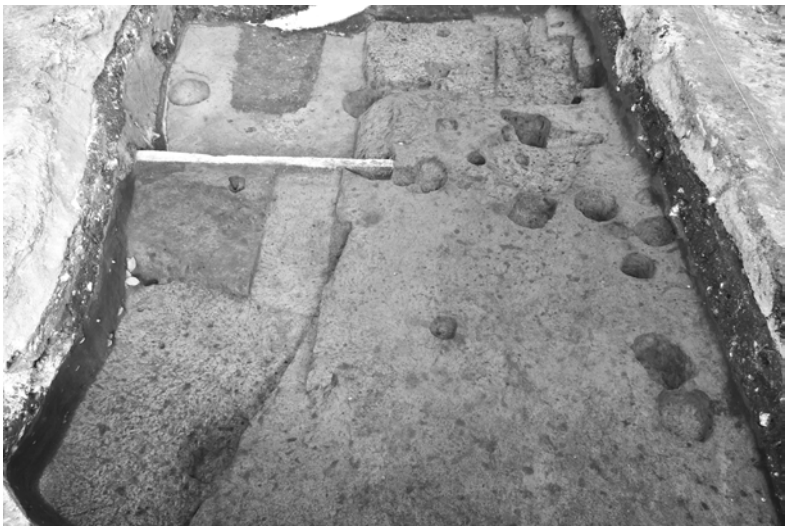
5．その他の出土遺物

100 は弥生土器の壺の底部である。底部径 5.0cm。102 は弥生土器の壺である。口縁部から胴部まで遺存する。胴部径に比して口縁部は短小である。103 は弥生土器の壺である。平底で底部径 15.0cm を測る。

Ⅲ．まとめ

今回の調査では弥生時代後期の竪穴住居３棟、同終末期の井戸１基などを確認した。南八幡遺跡における弥生時代の遺構は遺跡南西部に広がる傾向がみとめられ、本調査においてもそうした見解を裏付ける結果となった。遺跡西側には春日原丘陵を隔てる低地部が広がっており、弥生時代には水田としての利用が予想される。台地の縁辺に張り付くように居住域が立ち並び、その西側に水田が開かれた景観を復元できよう。

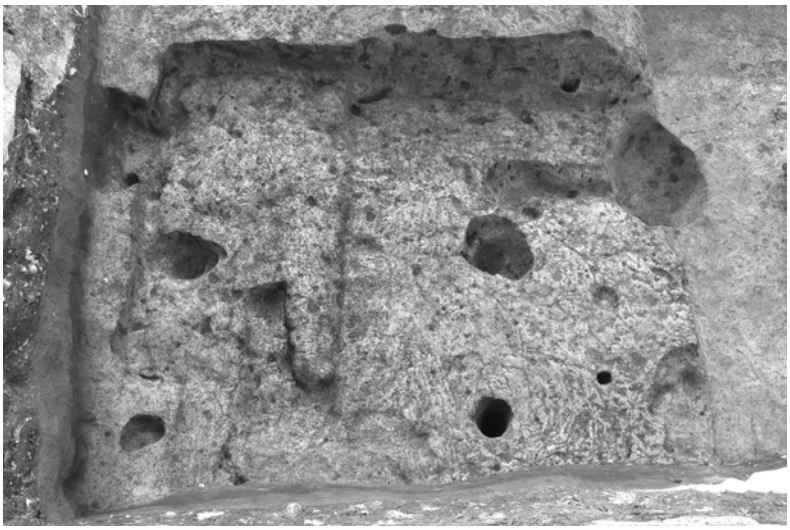
竪穴住居のうち２号住居および３号住居ではガラス小玉や鉄器類が出土し、なかでも３号住居のガラス小玉は径数十 cm の狭い領域に集中することから、数珠つなぎの状態で埋没したものと思われる。南八幡遺跡では第９次調査で多量のガラス玉が建物跡から見つかっているが、遺跡内で生産された痕跡は確認されていない。今回の出土状況も消費地的性格を示唆しており、必ずしも生産活動と結びつくものではない。もっとも市道を挟んで西側に位置する第 19 次調査区では銅鏃鋳型が出土することから、居住集団が鋳造技術を保有した可能性は排除できず、今後の調査においても引き続き注意する必要がある。



1　Ⅰ区全景　西から

2　Ⅱ区全景　北から

3　Ⅲ区全景　南から



1　1号住居　東から

2　1号住居　北から

3　2号住居（Ⅰ区）北から

1　２号住居出土状況（Ⅰ区）
　　北から

2　２・３号住居床面（Ⅱ区）
　　北から

3　２号住居出土状況（Ⅱ区）
　　西から

1　２号住居出土状況（Ⅱ区）
　　北から

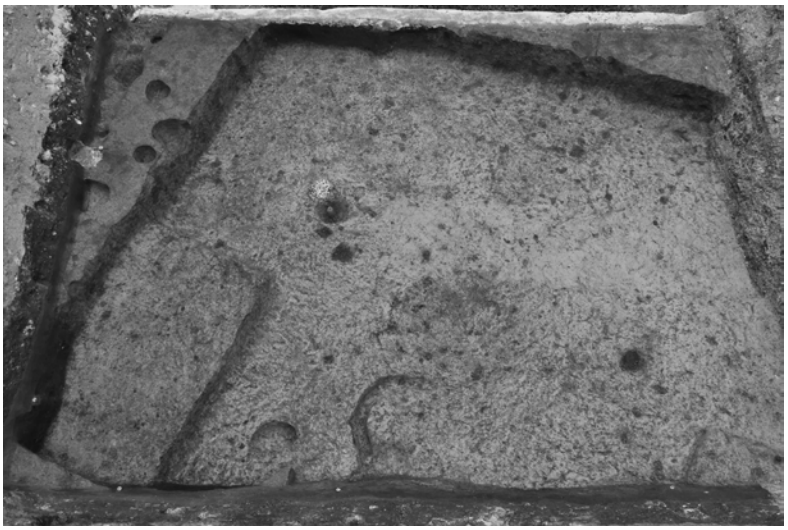
2　２号住居出土状況（Ⅱ区）
　　南から

3　２・３号住居完掘（Ⅱ区）
　　西から

1　３号住居床面（Ⅲ区）
　　西から

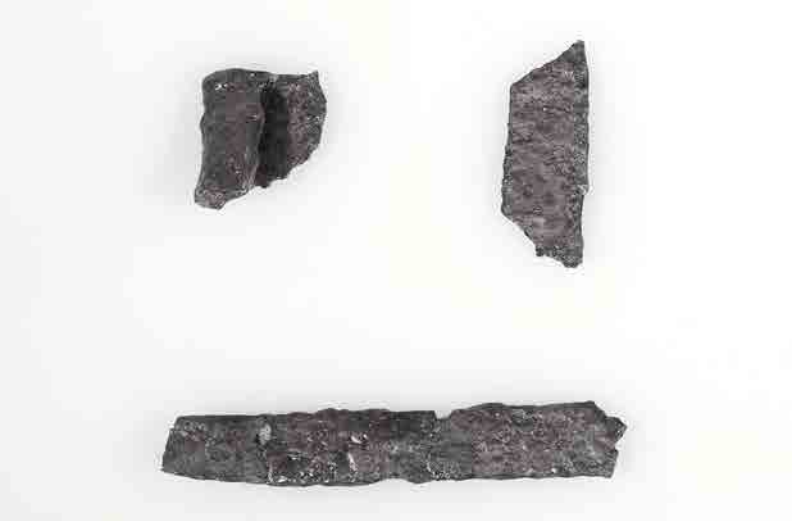
2　３号住居全景（Ⅲ区）
　　西から

3　３号住居（Ⅲ区）　南から



1　３号住居　西から

2　SE104　北から



3　鉄器

報告書抄録

ふりがな	みなみはちまんいせき 12　－だい22じちょうさほうこく－
書名	南八幡遺跡 12
副書名	―第22次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1520 集
編著者名	鶴来航介
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１－８－１
発行年月日	2024年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
みなみはちまんいせき 南八幡遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくことぶきまち 博多区寿町	40132	0051	33° 32' 37"	130° 27' 32"	20211115 ～ 20211223	128.40	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南八幡遺跡	集落	弥生時代	竪穴建物、溝、井戸	弥生土器、石器、鉄器、玉類	弥生時代の居住域を確認

要約

南八幡遺跡は春日丘陵からのびる中位段丘上に立地しており、本調査区は遺跡の中央部西側に位置する。

本調査では弥生時代後期の竪穴建物３棟と同終末期の井戸などを検出した。このうち２号住居では後期中葉を主体とする土器の一括廃棄の状況がみとめられ、西側の19次調査で見つかった建物の時期に近い。

今回の調査により、弥生時代後期を画期として遺跡西側の微高地縁辺に居住域が展開する様相が裏付けられた。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1520 集

南八幡遺跡12

－第22 次調査報告－

2024（令和６）年３月22日

発　行　福岡市教育委員会
〒810-8621　福岡市中央区天神１－８－１

印　刷　株式会社 博多印刷
〒812-0028　福岡市博多区須崎町８－５